

都城市所在

みやこのじょう

つるまるじょう

あと

都城（鶴丸城）跡

（西城西側法面の調査）

城山西側地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

みやこのじょう

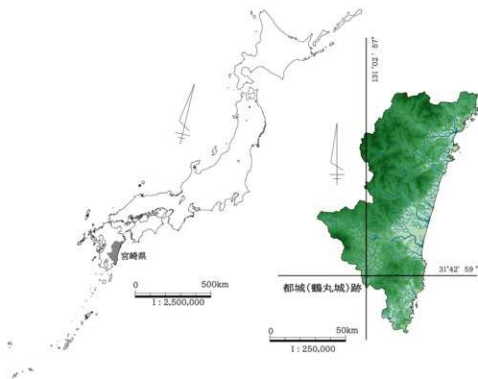
つるまるじょう

あと

都城（鶴丸城）跡

（西城西側法面の調査）

城山西側地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2024

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、城山西側地区急傾斜地崩壊対策工事に伴い、令和5年1月23日から令和5年2月8日にかけて、都城市都島町に所在する都城(鶴丸城)跡で埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

発掘調査の対象となった都城(鶴丸城)は、14世紀後葉の永和年間に北郷義久が築城したとされ、それ以後、室町から戦国期を通して都城盆地の中核城館としての役割を果たします。

その名称が自治体としての「都城市」に受け継がれていることから、まさに地域を象徴する存在であったことがわかります。

今回の発掘調査は、本丸の西側、狭野神社が鎮座する「西城」と呼ばれる曲輪法面の掘削を行う形をとりました。調査の結果、曲輪の構造に関するいくつかの見解が得られ、城郭が機能していた時期の中国産陶磁器や国産陶器などが出土するなど、かように重要な歴史遺産である都城(鶴丸城)跡の全体像把握に資する物証や情報が蓄積されることとなりました。

本書で報告する発掘調査成果や出土遺物等は、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用し、郷土の歴史や埋蔵文化財保護に対する理解の一助といたします。

最後になりましたが、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関、地元の方々には心より厚くお礼申し上げます。

令和6年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 吉本正典

例 言

- 1 本書は、城山西側地区急傾斜地崩壊対策工事に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した都城(鶴丸城)跡西城西側法面の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡名については、都城市教育委員会2019年3月発行の『都城跡-池ノ上城・中尾之城・取添確認調査報告書-』および都城市公式ホームページ掲載資料『市内南部域の遺跡(周知の埋蔵文化財包蔵地)』(<http://www.city.miyakonojo.miyazaki.jp/soshiki/60/1825.html>)に従い「都城(鶴丸城)跡」と呼称する。
- 3 発掘調査は、宮崎県県土整備部都城土木事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。発掘調査は令和5年1月23日から令和5年2月8日まで行った。(実調査日数9日間)
- 4 現地での調査記録は和田理啓、小吹雅史、山田洋一郎、小山輝晃、呼子友和(日向市からの派遣職員)が行った。
- 5 現地調査における空中写真撮影は、(有)スカイサーベイ九州に委託した。
- 6 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・遺物実測及びトレースは、和田の補助を得て小吹が行った。
- 7 本書で使用した第1図「都城(鶴丸城)跡及び周辺の城館跡・寺社跡・生産遺跡分布図」は国土地理院発行電子地形図25,000分の1および都城市公式ホームページ掲載資料『市内中央部域の遺跡(周知の埋蔵文化財包蔵地)』、『市内南部域の遺跡(周知の埋蔵文化財包蔵地)』をもとに作成した。
また、第2図「都城(鶴丸城)跡縄張図及びトレンチ配置図」は、都城市教育委員会 2019『都城跡 - 池ノ上城・中尾之城・取添確認調査報告書-』都城市文化財調査報告書第139集掲載の図2.都城跡縄張図(八巻1991)および都城土木事務所提供の『現地平面図』をもとに作成した。
また、第10図「竹之下都城御城図 都城島津家史料(西城・新城周辺)」は、都城島津邸提供の『竹之下都城御城図 都城島津家史料』をもとに作成した。
- 8 本書で使用した土層断面および遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』(2005年版)を参考にした。
- 9 本書で使用した方位は、全て座標北で、標高は海拔絶対高である。
また、本書で使用した座標は世界測地系(WGS84)九州第Ⅱ系に準拠している。
- 10 本書で使用した略記号は以下のとおりである。
Tr:トレンチ
- 11 本書の執筆・編集は小吹が担当した。
- 12 出土遺物撮影は、東意章の助言を受けて、小吹が行った。
- 13 整理作業に伴う自然科学分析については(株)古環境研究センターに委託した。
(結果については第IV章に掲載)
- 14 出土遺物・実測図・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

| | |
|---------------------|----|
| 第Ⅰ章 はじめに | |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査の組織 | 1 |
| 第Ⅱ章 遺跡周辺の環境 | |
| 第1節 遺跡の地理的環境 | 1 |
| 第2節 既往の調査 | 2 |
| 第3節 都城(鶴丸城)跡の歴史的環境 | 2 |
| 第Ⅲ章 調査の記録 | |
| 第1節 調査の方法と経過 | 3 |
| 第2節 調査の概要 | |
| 1 遺跡の立地と基本層序 | 3 |
| 2 各トレンチの状況 | 6 |
| 3 出土遺物 | 12 |
| 第Ⅳ章 自然科学分析 | |
| 第1節 自然科学分析の概要 | 16 |
| 第2節 放射性炭素年代測定 | |
| 1 試料と方法 | 16 |
| 2 測定結果 | 16 |
| 3 所見 | 17 |
| 第Ⅴ章 総括 | |
| 第1節 廃城前の都城(鶴丸城)について | 18 |
| 第2節 出土遺物について | 18 |
| 第3節 自然科学分析について | 18 |
| 第4節 西城西側の構造の復元について | 18 |
| 第5節 まとめ | 19 |

挿 図 目 次

| | | |
|--------|---|----|
| 第 1 図 | 都城(鶴丸城)跡及び周辺の城館跡・寺社跡・生産遺跡分布図(S=1:25,000)..... | 4 |
| 第 2 図 | 都城(鶴丸城)跡縄張り図(S=1:6,000)及びトレンチ配置図(S=1:600)..... | 5 |
| 第 3 図 | 都城(鶴丸城)跡 トレンチ 1・2・3 土層断面図(S=1:100)..... | 8 |
| 第 4 図 | 都城(鶴丸城)跡 トレンチ 4・6・7 土層断面図及びトレンチ 5 平面図(S=1:100)..... | 9 |
| 第 5 図 | 都城(鶴丸城)跡 トレンチ 8・9・10 土層断面図(S=1:100)..... | 10 |
| 第 6 図 | 都城(鶴丸城)跡 トレンチ 11・12・14・15 土層断面図(S=1:100)..... | 11 |
| 第 7 図 | 都城(鶴丸城)跡 出土青花・白磁(S=1:2)..... | 13 |
| 第 8 図 | 都城(鶴丸城)跡 出土陶器・土師器・染付(S=1:2)..... | 14 |
| 第 9 図 | 暦年較正結果..... | 17 |
| 第 10 図 | 竹之下都城御城図 都城島津家史料(西城・新城周辺)..... | 20 |
| 第 11 図 | 都城(鶴丸城)跡 西城西側の構造復元図(S=1:400)..... | 21 |

表 目 次

| | | |
|-------|-----------------------|----|
| 第 1 表 | 都城(鶴丸城)跡 出土遺物観察表..... | 15 |
| 第 2 表 | 放射性炭素年代測定結果..... | 17 |

図 版 目 次

| | |
|------|--|
| 図版 1 | 調査区遠景(西より 画面奥は大淀川) 調査区 垂直写真(写真右が北) |
| 図版 2 | トレンチ 8 北壁土層断面写真 トレンチ 10 北壁土層断面写真 トレンチ 15 北壁土層断面写真 作業風景① 作業風景② |
| 図版 3 | 都城(鶴丸城)跡 出土遺物(青花・白磁・染付) 都城(鶴丸城)跡 出土遺物(備前・輸入陶器・土師器) |

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回報告する発掘調査箇所は、都城(鶴丸城)跡を構成する曲輪群のうち、「西城」と呼ばれる本丸西側にある曲輪の一部である。

調査地は西城の西側法面に位置し、不安定土砂の堆積が顕著で、近年多発する集中豪雨等により周辺住民への被害が予想された。

そこで、宮崎県では西城西側法面に擁壁を設置し、これらの被害を未然に防止する事業、「城山西側地区急傾斜地崩壊対策工事」を計画することとなった。

事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「都城(鶴丸城)跡」であり、令和2(2020)年度に事業課である宮崎県砂防課および都城土木事務所から宮崎県文化財課に遺跡の取扱いについて照会が行われた。県文化財課はこの照会を受け、2021年6月に事業予定地の確認調査を行い、その結果をもって都城土木事務所と協議を重ね、周辺住民の安全確保の観点から、工事による遺跡への影響は避けられないとの結論に至った。

この結果を受け、文化財保護法94条に従い都城土木事務所より提出されていた工事通知に対し、宮崎県教育委員会から発掘調査の指示がされ、記録保存の措置が執られることとなった。発掘調査は宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、令和5年1月23日から2月8日(実調査日数9日間)にかけて行われた。

第2節 調査の組織

都城(鶴丸城)跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は、下記の組織で実施した。

調査主体:宮崎県教育委員会

調査機関:宮崎県埋蔵文化財センター

令和4年度 発掘調査及び整理作業

宮崎県埋蔵文化財センター

| | |
|------------|-----------|
| 所長 | 吉本 正典 |
| 副所長兼総務課長 | 片伯部 真一 |
| 調査課長 | 東 憲章 |
| 調査第一担当リーダー | 主幹 和田 理啓 |
| 調査第一担当 | 主査 小吹 雅史 |
| 調査第一担当 | 主査 山田 洋一郎 |
| 調査第一担当 | 主査 小山 輝晃 |

令和5年度 整理作業及び報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

| | |
|------------|----------|
| 所長 | 吉本 正典 |
| 副所長兼調査課長 | 東 憲章 |
| 総務課長 | 寺原 尚徳 |
| 調査第一担当リーダー | 主幹 和田 理啓 |
| 調査第一担当 | 主査 小吹 雅史 |

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の地理的環境

都城(鶴丸城)跡が位置する都城市は、宮崎市から西南西約50km、鹿児島市から東北東約90kmの宮崎県の南西端に位置し、北から南東にかけて高原町、小林市、宮崎市、三股町、日南市、串間市の4市2町、南西方面は鹿児島県霧島市、曾於市、志布志市の3市に隣接する。面積は約653km²、人口規模は約16万3千人の宮崎県第2の都市で、中心市街地は盆地南部に形成されている。

都城がその中央部に立地する都城盆地は東部を鰐塚山地、北西部を霧島火山群、西部を白鹿などの山々によって囲まれている。南西部は、山地が卓越しないため、曾於市方面に向けて開口している。盆地には東部の山地から沖水川、萩原川、東岳川、西部の山地から庄内川、横市川、南部からは安久川、梅北川などの小河川が市内中央部で大淀川に合流し北流する。これらの河川沿いには平坦な河岸段丘や扇状地が広がり、氾濫原や低地を形成している。

大淀川を境に盆地の北西隅から南西隅にかけては、標高180～260mのシラス台地と、このシラス台地の東側に形成された一段低い標高150～170mの成層シラス台地が広がる。盆地東部には、沖水川、萩原川、東岳川などの諸河川によって形成された、河岸段丘が広がっている。

都城(鶴丸城)跡は、盆地南西部に展開する成層シラス台地面の南東端部に位置し、遺跡の東には大淀川・梅北川・萩原川の合流点がある。本書で報告を行う調査箇所は、標高147～161m、現在狭野神社が建立されている城山の西側法面にあたる。

第2節 既往の調査

都城市には現在約1,500の周知の埋蔵文化財包蔵地があり、今回調査を行った都城(鶴丸城)跡周辺にも、多くの遺跡が点在している。都城(鶴丸城)跡と同時期の遺跡には、瀬戸ノ上遺跡(第1図21)、畑田遺跡(第1図3)、龍峯寺跡(第1図22)などがある。このうち1991年に調査を行った瀬戸ノ上遺跡では、溝状遺構や柱穴、土坑が確認され、中世の土師器、船載・国産陶磁器、金属加工関連遺物が出土している(都城市教育委員会 1992)。

1998年に調査を行った畑田遺跡では、中世の水田遺構や、13～14世紀の土師器、陶磁器が出土している(宮崎県埋蔵文化財センター2002)。2011年に発掘調査が行われた都城島津家の菩提寺である龍峯寺跡では、寺院跡に関連すると思われる掘立建物跡の柱穴や、中近世の陶磁器などが出土している(都城市教育委員会 2012)。

このように周辺の城館跡・寺社跡・生産遺跡では、中世の建物などの遺構や遺物が多く確認されており、当時の人々の生活の様子を窺うことができる。

また、本書に関連する西城における発掘調査として、1998年に園路・防護柵等の公園施設整備工事に先立つ曲輪南側の進入路拡幅部分、2014年には下水道管敷設工事に先立つ曲輪南西部の発掘調査が行われている。

1998年の調査では、竪穴状遺構や土坑墓、船載陶磁器(青磁・白磁・青花)、国産陶器(備前焼など)、土師器、古銭、金属製品などが確認されている(矢部喜多夫 2008)。2014年の調査では、土坑1基、中世土師器小片、白磁小片、備前焼片が確認された(都城市教育委員会 2015)。

第3節 都城(鶴丸城)跡の歴史的環境

都城盆地では中世の島津荘関連の遺跡が点在する。都城は14世紀後半に、現在の都島町に島津氏有力庶家の北郷氏によって築かれ、1615年(元和元年)の一國一城令によって廃城になるまで、約250年の間使用されてきた。

北郷氏は島津本宗家四代忠宗の六男資忠を始祖とする。資忠は島津荘北郷内薩摩迫(山田町)を与えられ、以後都城盆地に勢力を築く。資忠の子、義久が1375年、都城に移り住み、「本丸」、「西城」、「中之城」、「南之城」、「外城」を現在の都島町に構築したと伝えられるが、一次史料では確認できない。その後島津氏は、1376年九州内で室町幕府の権力を確立していた今川了俊との「南郷ならびに庄内合戦」、日向国支配に向け勢力を伸ばして

いた伊東氏との「曾井源藤の合戦」、「舐肥攻防戦」、「木崎原合戦」などを経て、1577年、日向国を一国知行とした。北郷氏もこれらの抗争に加わり、島津氏の日向国進出の一役を担った。また、伊東氏との抗争が続く最中、1532年～1555年にかけて、8代当主北郷忠相が、従来の城域の西南部に「新城」、「池之上城」、「中尾城」、「小城」を増築したとされる。10代当主北郷時久の代には、支配領域を現在の都城市域に加えて、勝岡、梶山、財部、末吉、曾於郡(鹿児島県霧島市の一部)、恒吉(鹿児島県曾於市大隅町南西部)、内之浦に及ぶ広大な範囲を支配するに至り、これに伴い北郷氏の支配領域を「都城」と呼ぶようになった(山下真一 2007)。

太閤検地後、1595年に北郷氏は祁答院(鹿児島県宮之城町)へ所替となり、都城は島津家の家老である伊集院忠棟の居城となる。この時期に、都城の「取添」部分が拡張された。この曲輪の増築については、中核部曲輪群の防衛の強化とともに、伊集院氏の行政機構拡大や豊臣政権の地方への権力誇示の可能性が指摘されている(都城市教育委員会 1991)。1599年に起きた「庄内合戦」で、北郷12代忠能が伊集院忠棟の子忠真を破り、江戸時代には再び北郷氏が都城領主となる。

1600年、関ヶ原の戦いから起り、徳川家康の東軍が勝利。1603年に徳川家康が征夷大將軍に任命される。江戸幕府が1615年の一国一城令を布告し、諸大名に居城以外の支城を破却させたことにより、約250年にわたり、都城盆地の政治の中心地として機能してきた都城は廃城を迎えることとなる。なお、16代当主北郷久定が1662年に病死し、島津宗家の命で家名を北郷から島津へと改めるまで、都城廃城後も北郷氏による都城盆地の治世は続いた。

調査区に関する「西城」は、現在、狭野神社が鎮座する位置に築城され、本丸の西に隣接している。西城の時代背景として、1615年の状況を示すとされる古絵図「竹之下都城御城図」(第10図)に、代官が派遣されて統治を行う役所である「臺官役」などの記載があり、中世紀には政治施設の存在が指摘される。江戸後期の編纂資料「庄内地理志」(巻6)によると、西城に「稲荷・荒神」の2社の存在が記されており、近世紀には信仰施設が存在していたと考えられる(都城市教育委員会 2015)。

現在、本丸跡には都城市歴史資料館、西城跡には、狭野神社が建立され、城山公園として、市民に親しまれている。

第三章 調査の記録

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は城山西側地区の急傾斜地崩壊対策工事に伴うものであり、擁壁建設により掘削される範囲が調査対象である。城郭の造成に伴う、地山であるシラスの堆積層の整形状況を調べることを調査の主な目的とした。調査方法としてトレンチを15箇所、重機にて掘削した。調査は令和5年1月23日～2月8日(実調査日数9日間)まで行った。

第2節 調査の概要

1 遺跡の立地と基本層序

調査対象地は都城盆地の南部、大淀川・梅北川・萩原川の合流点のやや北にあり、中世城郭「都城」の西城曲輪、西側法面の下に立地する。

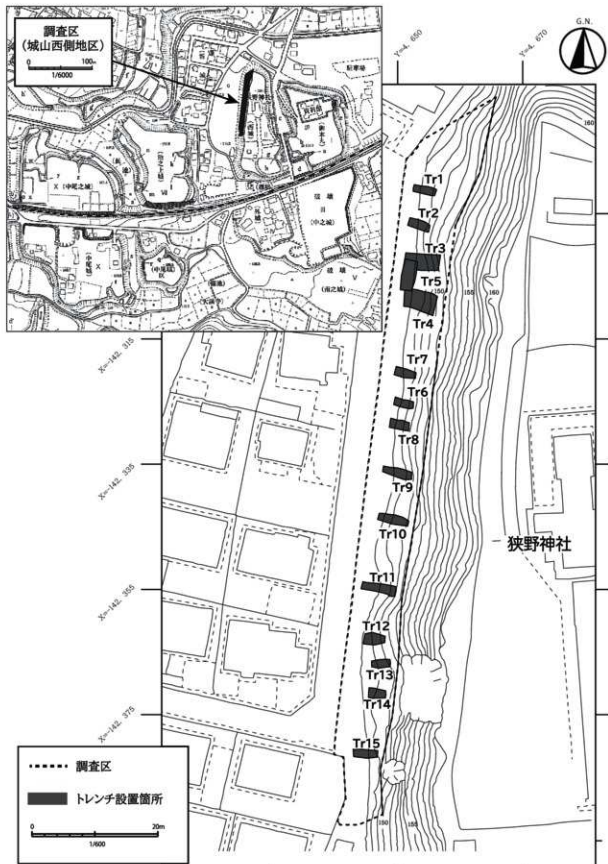
調査区は、南北に長さ80mほどと細長く、狭野神社から西に傾斜50度ほど下る急勾配の地形となっている。法面を下り終えると、そこから平坦な地形が西に続いている。



国土地理院発行電子地形図 25,000 を利用して作成

- | | | |
|--------------------|----------------|------------------|
| 1 都城(鶴丸城)跡(城山西側地区) | 2 牧ノ原第2遺跡 | 3 畑田遺跡(新宮城跡) |
| 4 母智丘谷遺跡 | 5 馬渡遺跡 | 6 薮原遺跡 |
| 7 江内谷遺跡 | 8 坂元A遺跡 | 9 加治屋B遺跡 |
| 10 早馬遺跡 | 11 松元遺跡(蒲生屋敷跡) | 12 正坂原遺跡 |
| 13 ニタ元遺跡 | 14 小松原焼窯跡 | 15 東町原口遺跡 |
| 16 秋永屋敷跡 | 17 姫城城跡 | 18 下長飯安留遺跡 |
| 19 大岩田(大和田)城跡 | 20 天長寺跡 | 21 瀬戸ノ上遺跡(龍峯寺城跡) |
| 22 龍峯寺跡 | | |

第1図 都城(鶴丸城)跡及び周辺の城館跡・寺社跡・生産遺跡分布図 (S=1:25,000)



第2図 都城(鶴丸城)跡縄張図(S=1:6,000)及びトレンチ配置図(S=1:600)

*縄張図は八巻孝夫作成(都城市文化財調査報告書第139集による)

基本層序としては、地山である灰白色のシラス堆積層の上に、厚さ 2~4m ほど、西城西側法面からの崩落土や表土および造成土が堆積している。このシラス堆積層は、今からおよそ 3 万年前に起こった始良火山の大噴火による火砕流で、都城盆地が埋め尽くされた時期の層である。

2 各トレンチの状況

トレンチ 1・2(第 2 図・第 3 図)

調査区北側に設けたトレンチである。表土、造成土および狭野神社側からの崩落土の層が厚く、地山であるシラスの堆積層まで掘削することができなかった。

トレンチ 3(第 2 図・第 3 図)

調査区北側、表土、造成土および崩落土の量が少ない法面に設けたトレンチである。標高 149.9m の法面から下方に約 5.3m で、地山のシラスの堆積層が検出された。地山は、標高 145.8m の箇所は犬走状に平坦に整地され、トレンチの西端から 2.9m の所で段状に掘削されていた。

トレンチ 4(第 2 図・第 4 図)

トレンチ 3 の南、表土および崩落土の量が少ない法面に設けたトレンチである。標高 148.9m の地点から下方に約 2.5m で、地山のシラスの堆積層が検出された。掘削範囲を広げ、地山の形状を確認したところ、トレンチ東壁下端から西に地山法面が約 40 度で傾斜しており、標高 145m の地点からは平坦に整地されていた。

トレンチ 5(第 2 図・第 4 図)

トレンチ 5 は、トレンチ 3 で確認された平坦面の南側への広がりを確認するため、トレンチ 3 と 4 の間に設けた。トレンチ上端から 1.3m、標高 145.3m の高さで、北端から約 2m、東壁から約 0.6m の範囲に平坦面が検出され、南側で途切れていることが分かった。(第 4 図 トレンチ 5 点線部分参照)

トレンチ 6(第 2 図・第 4 図)

調査区中央よりやや北側の法面に設けたトレンチである。標高 147.8m の地点から下方に約 3.2m で、地山のシラスの堆積層が検出された。確認された地山の形状から、トレンチ 6 では、西城西側法面が傾斜 66 度ほどで還元される。

トレンチ 7(第 2 図・第 4 図)

トレンチ 6 から南へ約 3m の法面に設けたトレンチである。標高 149.1m の地点から下方に約 4.3m で、地山のシラスの堆積層が検出された。掘削範囲を広げ、地山の形状を確認したところ、標高 145.6m 地点で平坦に整地され、トレンチ東壁下端から西へ約 1m の地点で段状に掘削されていた。

トレンチ 8(第 2 図・第 5 図・図版 2)

トレンチ 6、7 同様、調査区中央よりやや北側の法面に設けたトレンチである。標高 148.2m の地点から下方に約 4m で、地山のシラスの堆積層が検出された。掘削範囲を広げ、地山の形状を確認したところ、標高 144.6m

の地点からはやや平坦に整地されていた。

また、トレンチ 8 では検出された地山の上に、黒色土の層が堆積していた。黒色土の上下の堆積層の年代が判断できると考え、自然科学分析のためのサンプルを採取した。(自然科学分析の結果については、第 IV 章に記載。)

トレンチ 9(第 2 図・第 5 図)

調査区中央付近の法面に設けたトレンチである。標高 150.4m の地点から下方に約 5.3m で、地山のシラスの堆積層が検出された。確認された地山の形状から、トレンチ 9 では、西城西側法面が傾斜 65 度ほどで復元される。

トレンチ 10(第 2 図・第 5 図・図版 2)

調査区中央付近における、表土、造成土および狹野神社側からの崩落土が平たく堆積している法面に設けたトレンチである。標高 149.2m の地点から下方に約 4m で、地山のシラスの堆積層が検出された。地滑りの影響などで地山の状態が乱れていると考えられ、トレンチ 10 では法面の復元が困難である。

トレンチ 11(第 2 図・第 6 図)

調査区中央より、やや南側の法面に設けたトレンチである。標高 150.2m の地点から下方に約 5.5m で、地山のシラスの堆積層が検出されたため、掘削範囲を広げ、その形状を確認した。地滑りの影響などで地山の状態が乱れていると考えられ、トレンチ 11 では法面の復元が困難である。

トレンチ 12(第 2 図・第 6 図)

トレンチ 11 から南へ約 6m の法面に設けたトレンチである。標高 149.5m の地点から下方に約 4.5m で、地山のシラスの堆積層が検出された。確認された地山の形状から、トレンチ 12 では、西城西側法面が傾斜 73 度ほどで復元される。

トレンチ 13(第 2 図)

調査区南側、表土、造成土および狹野神社側からの崩落土が平たく堆積している法面の北端に設けたトレンチである。トレンチ 13 においては、表土、造成土および崩落土の層が厚く、崩落の危険があったため、地山まで掘削することはできなかった。

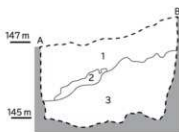
トレンチ 14(第 2 図・第 6 図)

調査区南側、表土、造成土および狹野神社側からの崩落土が平たく堆積している法面に設けたトレンチである。標高 150.3m の地点から下方に約 2.4m で、地山のシラスの堆積層が検出された。地滑りの影響などで地山の状態が乱れていると考えられ、トレンチ 14 では法面の復元が困難である。

トレンチ 15(第 2 図・第 6 図・図版 2)

調査区の南側に設けたトレンチである。標高 149.8m の地点から下方に約 3.8m で、地山のシラスの堆積層が検出された。掘削範囲を広げ、地山の形状を確認したところ、標高 147.8m のあたりで地山が平坦に整地され

トレンチ1 北側土層断面図(S=1:100)

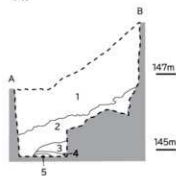


- 1 褐色(7.5YR4/4)土 しまりなし。幅0.8mほどの灰白色のブロックを含む。
- 2 灰黄褐色(10YR2/4)土 しまりなし。
- 3 黒褐色(10YR2/2)土 しまりなし。

*1~3層は、法面の崩落に伴い堆積した層である。
地山の確認には至っていない。



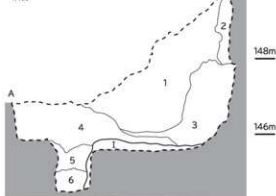
トレンチ2 北側土層断面図(S=1:100)



- 1 黒褐色(7.5YR3/1)土 しまりなし。黄褐色の土を含む。
- 2 黄褐色(10YR7/8)土 しまりなし。灰白色のシラス質の土が多く混ざる。
- 3 にぶい黄褐色(10YR5/3)土 しまりあり。
- 4 暗褐色(10YR3/2)土 しまりなし。ブロック状のアカホヤを含む。
- 5 暗褐色(10YR3/3)土 しまりなし。

*1~5層は、法面の崩落に伴い堆積した層である。
地山の確認には至っていない。

トレンチ3 北側土層断面図(S=1:100)



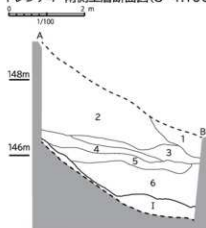
- 1 暗褐色(7.5YR3/3)土 しまりなし。ブロック状のアカホヤを含む。
- 2 黄褐色(7.5YR8/8)土 しまりなし。
- 3 灰白色(5YR8/1)土 しまりなし。ブロック状のアカホヤを含む。
- 4 黒褐色(7.5YR3/2)土 しまりあり。幅0.5mほどの灰白色のブロックを含む。
- 5 黄褐色(10YR7/8)土 しまりなし。灰白色のシラス質の土を10%ほど含む。
- 6 暗赤褐色(5YR3/2)土 しまりなし。黄褐色(7.5YR8/8)土を多く含む。
- I 灰白色(10YR1/8)土 しまりなし。

* I層が地山であるシラスの堆積層。1~6層は、法面の崩落に伴い堆積した層。



第3図 都城(鶴丸城)跡 トレンチ1・2・3 土層断面図(S=1:100)

トレンチ4 南側土層断面図(S=1:100)

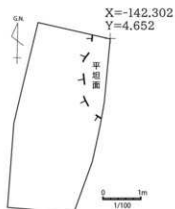


- 1 暗褐色(10YR4/3)土 しまりなし。
 2 黒褐色(10YR2/2)土 しまりなし。黄褐色の土を含む。
 3 暗褐色(10YR4/3)土 しまりなし。黄褐色の土を含む。
 4 明黄褐色(2.5Y6/7)土 しまりあり。褐色 10YR4/4の土を含む。
 5 灰黄褐色(10YR2/4)土 しまりなし。白と黄の土を含む。
 6 黒褐色(2.5Y2/3)土 しまりあり。

I 灰白色(10YR1/8)土 しまりなし。

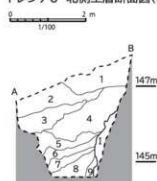
* I層が地山であるシラスの堆積層。1～6層は、法面の崩落に伴い堆積した層。

トレンチ5 平面図(S=1:100)



----- トレンチ内で検出された地山であるシラスの堆積層

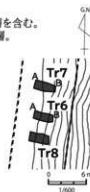
トレンチ6 北側土層断面図(S=1:100)



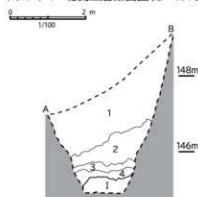
- 1 にぶい褐色(7.5YR3/5)土 しまりなし。
 2 にぶい褐色(7.5YR4/5)土 しまりあり。
 3 にぶい黄褐色(10YR3/5)土 しまりあり。明褐色(7.5YR8/5)土を含む。
 4 黄褐色(10YR6/8)土 しまりあり。
 5 にぶい黄褐色(10YR3/7)土 しまりあり。
 6 にぶい黄褐色(10YR4/7)土 しまりあり。
 7 にぶい黄褐色(10YR3/4)土 しまりあり。
 8 にぶい黄褐色(10YR3/4)土 しまりあり。1～3cm大の礫層を含む。
 9 にぶい黄褐色(10YR4/7)土 しまりあり。細かい砂粒状の層。

I 灰白色(10YR1/8)土 しまりなし。

* I層が地山であるシラスの堆積層。
 1～9層は、法面の崩落に伴い堆積した層。



トレンチ7 北側土層断面図(S=1:100)



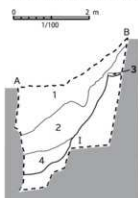
- 1 褐色(10YR4/4)土 しまりあり。
 黄褐色(10YR6/5)土、明黄褐色(10YR4/7)土、にぶい黄褐色(10YR4/7)土を含む。
 2 にぶい黄褐色(7.5YR4/5)土 しまりなし。砂粒状。
 3 黒褐色(10YR2/2)土 しまりあり。
 4 にぶい黄褐色(10YR4/7)土 しまりあり。

I 灰白色(10YR1/8)土 しまりなし。

* I層が地山であるシラスの堆積層。
 1～4層は、法面の崩落に伴い堆積した層。

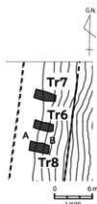
第4図 都城(鶴丸城)跡 トレンチ4・6・7土層断面図及びトレンチ5平面図(S=1:100)

トレンチ8 北側土層断面図(S=1:100)

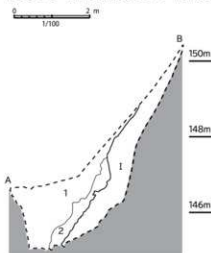


- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 黒褐色(7.5YR2/2)土 | しまりなし。 |
| 2 黄褐色(10YR4/7)土 | しまりあり。5mm~1cm大の礫を含む |
| 3 黒色(10YR2/1)土 | しまりあり。1~3mm大の礫を含む。 |
| 4 にぶい黄褐色(10YR3/4)土 | しまりあり。 |
| I 灰白色(10YR8/1)土 | しまりなし。 |

* I層が、地山であるシラスの堆積層。
3層が、自然科学分析のサンプルを採取した黒色土の層。
1、2、4層は、法面の崩落に伴い堆積した層。

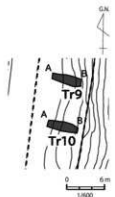


トレンチ9 北側土層断面図(S=1:100)

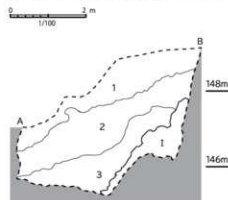


- | | |
|--|--------|
| 1 褐色(7.5YR3/4)、橙色(7.5YR6/7)、橙色(10YR1/8)の混色土。 | |
| しまりなし。シラスの土を含む。 | |
| 2 にぶい黄褐色(10YR3/4)土 | しまりなし。 |
| I 灰白色(10YR1/8)土 | しまりなし。 |

* I層が、地山であるシラスの堆積層。
黄色(2.5YR6/8)土、橙色(5YR8/7)土が混ざり、ラミナ状に堆積している。
1、2層は、法面の崩落に伴い堆積した層。



トレンチ10 北側土層断面図(S=1:100)

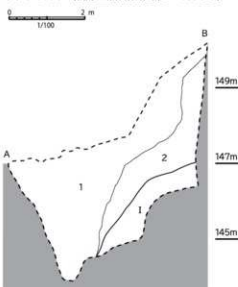


- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1 黒褐色(10YR2/3)土 | しまりなし。 |
| 2 黄褐色(7.5YR6/5)土 | しまりなし。 |
| 3 浅い黄褐色(10YR4/8)土 | しまりあり。褐色や橙、灰色の土を含む。 |
| I 灰白色(10YR1/8)土 | しまりなし。 |

* I層が、地山であるシラスの堆積層。
1~3層は、法面の崩落に伴い堆積した層。

第5図 都城(鶴丸城)跡 トレンチ8・9・10土層断面図(S=1:100)

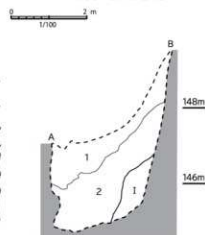
トレンチ11 北側土層断面図(S=1:100)



- 1 黒褐色(7.5YR3/1)土 しまりなし。黄褐色(10YR4/7)の
ブロック土を少量含む。
2 明黄褐色(10YR6/6)土 しまりなし。
I 灰白色(10YR1/8)土 しまりなし。

* I層が地山であるシルスの堆積層。
1, 2層は、法面の崩落に伴い堆積した層。

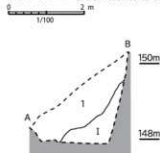
トレンチ12 北側土層断面図(S=1:100)



- 1 浅黄色(2.5YR3/7)土 しまりなし。
2 にぶい黄褐色(10YR3/4)土 しまりなし。
I 灰白色(10YR1/8)土 しまりなし。

* I層が地山であるシルスの堆積層。
1, 2層は、法面の崩落に伴い堆積した層。

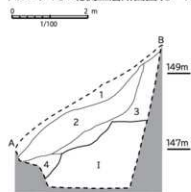
トレンチ14 北側土層断面図(S=1:100)



- 1 黒褐色(10YR3/2)土 しまりなし。
灰黄褐色(10YR4/2)土、にぶい黄褐色(10YR6/4)土を含む。
I 灰白色(10YR1/8)土 しまりなし。
黄褐色(7.5YR7/8)土、浅黄橙(10YR8/3)土が混ざり、
ラミナ状に堆積している。

* I層が地山であるシルスの堆積層。
I層は、法面の崩落に伴い堆積した層。

トレンチ15 北側土層断面図(S=1:100)



- 1 褐色(7.5YR4/3)土 しまりなし。
2 明黄褐色(10YR7/6)土 しまりなし。
3 にぶい黄褐色(10YR6/4)土 しまりあり。
4 浅黄橙色(10YR8/3)土 しまりなし。
I 灰白色(10YR1/8)土 しまりなし。

* I層が、地山であるシルスの堆積層。
浅黄色(2.5YR7/3)土、黄褐色(10YR8/6)土が混ざり、ラミナ状に堆積している。
1~5mm大の礫を含む。1~4層は、法面の崩落に伴い堆積した層。

第6図 都城(鶴丸城)跡 トレンチ11・12・14・15土層断面図(S=1:100)

ていた。

3 出土遺物

出土遺物は、トレンチ 10 から最も多く出土しており、トレンチ 8、トレンチ 3 から出土している。輸入磁器類が大半を占め、凡そ 16 世紀～17 世紀に位置づけられる。

1、2 はトレンチ 10、3 はトレンチ 8 から出土し、4、5 は表土中から出土した青花の碗である。1～4 が景德鎮窯青花、5 は漳州窯系青花である。

1 は内面に圏線と草花文が絵付けされており、見込部は平坦にならず、高台内に向けてややへこんだような形になっている。高台は三角形で、畳付の軸がかかっている。2 は直口口縁をもつもので、口縁端部内外面に圏線が描かれている。3、4 は青花片、5 は見込部に筆で草花文、外面の高台脇に圏線が描かれている。体部外面にも草花文が描かれていた可能性がある。

6～11 は青花の皿である。6～8 はトレンチ 10、9～11 は表土中から出土したものである。6～11 のうち、7 は漳州窯系青花、それ以外は景德鎮窯青花である。

6 の高台は細く、畳付の軸がかかっており、高台内に放射状のカンナ跡が残っている。底部内面の二重圏線内に水面のような表現があり、蓮池水禽文、あるいは山水文の可能性もある。体部内面の一部にも草花のような表現がある。7 は端反皿の口縁部～体部である。胎土は磁器質であり、先透性の白濁釉が分かり、外面にピンホールが目立つ。8、9 は内湾口縁の青花片、10、11 は皿の底部である。10、11 は、高台内に放射状のカンナ跡が残り、2 つとも底部内面に輪郭を線描きした「壽」文字が描かれている。16 世紀末～17 世紀前半の遺物であり、高台内に銘款があるが、判読は不能である。

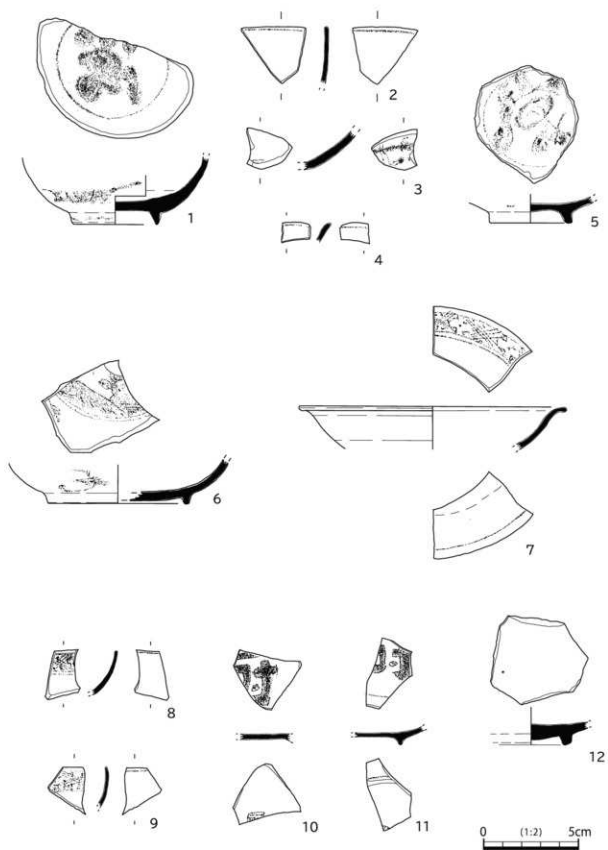
12 は邵武窯系白磁の皿の底部である。外部底面は施釉されていない。今回の調査で確認された白磁はこの 1 点のみである。

13～16 は備前の陶器である。14 のみトレンチ 3 より出土、それ以外は表土中から出土した。13 は口縁部に注ぎ口がついたすり鉢、14 は甕の破片である。15、16 は同一個体であり、首のないつぼ型の水指の細片であると考えられる。

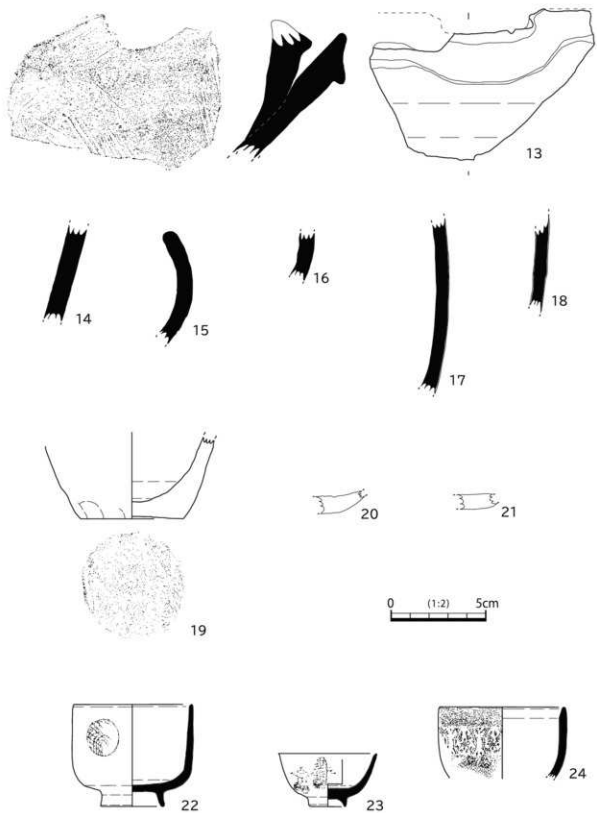
17 は褐釉陶器、18 は黒釉陶器の破片であり、トレンチ 10 から出土した。17、18 とも器種を判別することができなかったが、どちらも中国産の輸入陶器である。

19～21 は土師器であり、表土中から出土した。19 の破片は壺の胴部～底部、20、21 は、皿もしくは杯の底部にあたると思われる。

22～24 は染付の碗である。22 がトレンチ 8、23・24 は表土中から出土した。22 は 19 世紀ごろの筒丸碗である。23 は小型の碗で、体部外面に山水楼閣文が絵付けされている。24 は口縁部から体部の外面に、にぶい黄色、灰白色、にぶい黄色と 3 段階に軸がかかっている。灰白色の釉の表面に、暗緑灰色で草花の文様が絵付けされ、破片下部のにぶい黄色の釉の表面に、暗赤色で「記念」の文字が描かれている。



第7図 都城(鶴丸城)跡 出土青花・白磁 (S=1:2)



第8図 都城(鶴丸城)跡 出土陶器・土師器・染付(S=1:2)

| 遺物 番号 | 種類 | 形状 | 部位 | 出土状況 | 長さ(cm) | | | 口径・底径・器高 | | 色相 | | 胎土の特徴 | 備考 |
|----------|-----|----------------|------------|--------|--------|-------|-----|------------|------------|------------------------------|-------------------|----------------------------------|--|
| | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 内径 | 外径 | 色相 | | | |
| | | | | | | | | | | 内径 | 外径 | | |
| 1 | 青花 | 碗 | 体部 ～底部 | トレンチ10 | - | 4.5 | - | 施釉 | 施釉 | 明青灰 5BG7/1 | 明青灰 5BG7/1 | 精良 焼成:堅緻 | 中層に黒色 鉄→17世紀の遺物 |
| 2 | 青花 | 碗 | 口縁部 ～体部 | トレンチ10 | - | - | - | 施釉 | 施釉 | 明緑灰 10GY8/1 | 明青灰 10BG7/1 | 精良 焼成:堅緻 | 中層の二三の器 鉄→17世紀の遺物 |
| 3 | 青花 | 碗 | 体部 | トレンチ8 | - | - | - | 施釉 | 施釉 | 明青灰 10BG7/1 | 明緑灰 10GY8/1 | 精良 焼成:堅緻 | 鉄→17世紀の遺物 |
| 4 | 青花 | 碗 | 口縁部 ～体部 | 表土中 | - | - | - | 施釉 | 施釉 | 明緑灰 10GY7/1 | 明緑灰 10GY7/1 | 精良 焼成:堅緻 | 鉄→17世紀の遺物 |
| 5 | 青花 | 碗 | 体部 ～底部 | 表土中 | - | 4.4 | - | 施釉 | 施釉 | 灰白 5Y7/2 | 灰白 5Y7/2 | 陶質 焼成:不良 | 焼成不良のため青色がよ くない 鉄→17世紀の遺物 |
| 6 | 青花 | 皿 | 体部 ～底部 | トレンチ10 | - | (7.9) | - | 施釉 | 施釉 | 明青灰 5BG7/1 | 明青灰 5BG7/1 | 精良 焼成:堅緻 | 中層に黒色 鉄→17世紀の遺物 |
| 7 | 青花 | 皿 | 口縁部 ～体部 | トレンチ10 | (14.2) | - | - | 施釉 | 施釉 | 明緑灰 10GY8/1 | 明緑灰 10GY8/1 | 精良 焼成:堅緻 | 口縁部外側に黒線 口縁部内面に白青灰文 鉄→17世紀の遺物 |
| 8 | 青花 | 皿 | 口縁部 ～体部 | トレンチ10 | - | - | - | 施釉 | 施釉 | 明緑灰 5G7/1 | 明青灰 10BG7/1 | 精良 焼成:堅緻 | 口縁部外側に黒線 口縁部内面に白青灰文 鉄→17世紀の遺物 |
| 9 | 青花 | 皿 | 口縁部 ～体部 | 表土中 | - | - | - | 施釉 | 施釉 | 明青灰 10BG7/1 | 明青灰 10BG7/1 | 精良 焼成:堅緻 | 口縁部外側に黒線 口縁部内面に白青灰文 鉄→17世紀の遺物 |
| 10 | 青花 | 皿 | 底部 | 表土中 | - | - | - | 施釉 | 施釉 | 明青灰 10BG7/1 | 明緑灰 10GY8/1 | 精良 焼成:堅緻 | 鉄→17世紀の遺物 |
| 11 | 青花 | 皿 | 底部 | 表土中 | - | - | - | 施釉 | 施釉 | 明青灰 10BG7/1 | 明緑灰 10GY8/1 | 精良 焼成:堅緻 | 鉄→17世紀の遺物 |
| 12 | 白磁 | 皿 | 底部 | 表土中 | - | 4.2 | - | 無釉 | 施釉 | 灰白 5Y8/1 | 灰白 5Y8/1 | 精良 焼成:堅緻 | 鉄→17世紀の遺物 |
| 13 | 備前 | ナベ | 口縁部 ～体部 | 表土中 | - | - | - | 回転 ナデ | 回転 ナデ | 黄灰 2.5Y6/1 | 黄灰 2.5Y6/1 | 2mm以下の黄褐色を 全体の1%ほど含む 焼成:堅緻 | 中層(15世紀)ごろの遺物 |
| 14 | 備前 | 甕 | - | トレンチ3 | - | - | - | 無釉 | 無釉 | にぶい褐色 7.5YR6/3 | にぶい褐色 7.5YR6/3 | 2mm以下の黄褐色を 全体の1%ほど含む 焼成:堅緻 | 中層に黒線(7.5YR6/3)が 口縁部に施されている 中層の遺物 |
| 15 | 備前 | 茶碗? | - | 表土中 | - | - | - | 自然釉 | 無釉 | 黄灰色 2.5Y4/1 | 灰色 5Y4/1 | 2mm以下の黄褐色を 全体の1%ほど含む 焼成:堅緻 | 中層の遺物 |
| 16 | 備前 | 茶碗? | - | 表土中 | - | - | - | 自然釉 | 無釉 | 黄灰色 2.5Y4/1 | 灰色 5Y4/1 | 2mm以下の黄褐色を 全体の1%ほど含む 焼成:堅緻 | 中層の遺物 |
| 17 | 褐陶器 | - | - | トレンチ10 | - | - | - | 施釉 露胎 | 無釉 | 黒褐色 2.5Y3/1 | 灰 5Y6/1 | 2mm以下の黄褐色を 全体の1%ほど含む 焼成:堅緻 | 本層に黄褐色(焼成不良?)が 口縁部に施されている 全体の1%ほど含まれてい る 中層の遺物 |
| 18 | 黒陶器 | - | - | トレンチ10 | - | - | - | 施釉 | 施釉 | 黒褐色 7.5YR3/1 | 黒褐色 7.5YR3/1 | 2mm以下の黄褐色を 全体の1%ほど含む 焼成:堅緻 | 中層の遺物 |
| 19 | 土師器 | 燈 台 | ～底部 | 表土中 | - | 5.4 | - | 回転 ココナデ | 回転 ココナデ | 黄褐色 2.5Y7/3 | 灰黄褐色 10YR5/2 | 2mm以下の黄褐色を 全体の1%ほど含む 焼成:良好 | 中層にコナデの線が施 されている 中層の遺物 |
| 20 | 土師器 | 皿 もしくは 鉢 | 底部 | 表土中 | - | - | - | ナデ | ナデ | にぶい黄褐色 10YR7/4 | にぶい黄褐色 10YR7/4 | 2mm以下の黄褐色を 全体の1%ほど含む 焼成:良好 | 中層にナベの器が埋蔵し ている 中層の遺物 |
| 21 | 土師器 | 皿 もしくは 鉢 | 底部 | 表土中 | - | - | - | ナデ | ナデ | にぶい黄褐色 10YR6/4 | にぶい黄褐色 10YR6/3 | 2mm以下の黄褐色を 全体の1%ほど含む 焼成:良好 | 中層の遺物 |
| 22 | 染付 | 茶碗 | 口縁部 ～底部 | トレンチ8 | 6.4 | 3.4 | 5.4 | 施釉 | 施釉 | 灰白 7.5Y8/1 | 灰白 7.5Y8/1 | 精良 焼成:堅緻 | 19世紀の遺物 |
| 23 | 染付 | 碗 | 口縁部 ～底部 | 表土中 | (5.2) | 2 | 2.8 | 施釉 | 施釉 | 灰白 N8/ | 灰白 N8/ | 精良 焼成:堅緻 | 近代・現代の遺物 |
| 24 | 染付 | 碗 | 口縁部 ～体部 | 表土中 | (6.8) | - | - | 施釉 | 施釉 | にぶい黄 2.5Y6/4 灰白7.5Y8/1 | 灰白 HueN8/ | 精良 焼成:堅緻 | 近代・現代の遺物 |

*口径、底径、器高の()は推定の長さ

第1表 都城(鶴丸城)跡 出土遺物観察表

第IV章 自然科学分析

株式会社 古環境研究センター

第1節 自然科学分析の概要

都城(鶴丸城)跡のトレンチ 8 から採取された黒色土について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定である。

第2節 放射性炭素年代測定

1 試料と方法

試料は、トレンチ 8 東壁においてシルス層上部の黒色土から採取された1点である。第 2 表に試料の詳細および前処理・測定法を示す。

測定は加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)で行った。

2 測定結果

AMS 法によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(¹⁴C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。第 2 表にこれらの結果を示し、第 9 図に各試料の暦年較正結果(較正曲線)を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素(¹⁴C)年代測定値(BP: Before Physics)

試料の¹⁴C/¹²C比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を使用している。

付記した統計誤差(±)は1 σ ^{シグマ}(68.27%確率)である。¹⁴C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値を併記した。

(3) 暦年代(Calendar Years: cal BC / AD)

放射性炭素年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正した値。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値などから作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal20、較正プログラムはOxCal4.4である。

暦年代(較正年代)は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1 σ (68.27%確率)と2 σ (95.45%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

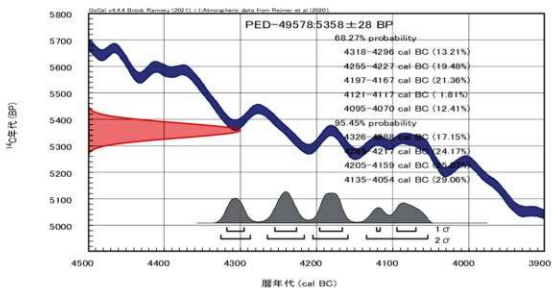
3 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1(黒色土)では 5360 ± 30 年BP (2σ の暦年代でBC4326-4288, 4265-4217, 4205-4159, 4135-4054年)の年代値が得られた。

なお、堆積物による年代測定結果は、その堆積物が生成された当時の年代を示しており、過去における擾乱や再堆積および続成作用などの影響もあることから、考古学的所見とは必ずしも一致しない場合がある。

| 試料No. | 測定No. PED- | 試料の詳細 | 種類 | 前処理 | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | ^{14}C 年代 (年BP) | 暦年校正用 年代(年BP) | 暦年代(校正年代) | |
|-------|------------|------------------------|-----------------------|---------------|------------------------------|-----------------------------|------------------|--|--|
| | | | | 測定法 | | | | 1 σ (68.27%確率) | 2 σ (95.45%確率) |
| 1 | 49578 | トロンチ8 シラス層上の 黒色土 | 黒色土 (ヒューミン を測定) | AAA処理 AMS法 | -36.37 ± 0.49 | 5360 ± 30 | 5358 ± 28 | cal BC 4318-4296 (13.21%) cal BC 4255-4227 (19.48%) cal BC 4197-4167 (21.36%) cal BC 4121-4117 (1.81%) cal BC 4095-4070 (12.41%) | cal BC 4326-4288 (17.15%) cal BC 4265-4217 (24.17%) cal BC 4205-4159 (25.07%) cal BC 4135-4054 (29.06%) |

第 2 表 放射性炭素年代測定結果



第 9 図 暦年校正結果

文献

- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」, 日本第四紀学会, p.3-20.
- 中村俊夫(2003)放射性炭素年代測定法と暦年代校正. 環境考古学マニュアル, 同成社, p.301-322.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, Radiocarbon, 51(1), p.337-360.
- Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP), Radiocarbon, 62(4), p.725-757.

第V章 総括

第1節 廃城前の都城(鶴丸城)について

第10図に示した『竹之下都城御成図』は、天和2年(1682年)以前の成立で、各曲輪には実在の家臣名がみられ、屋敷配置を示すと考えられる(都城市教育委員会 2019)。この図によると本丸近くの大淀川沿いに、土持摂津之助や小杉宗文といった近世初期における家老クラスの重臣層の名前が確認できる。また、小城や中之城、西城、外城などにも家臣の居住地の記載がみられる。このように都城(鶴丸城)の周辺には、家臣団の居住地がその階層ごとに配置されていたことがわかる(山下真一 2005)。

また、今回の調査区に接する西城と新城の曲輪に挟まれる谷状の地形に、「椀山与次右ノ門」、「伊ヶ倉左近」、「福留加藤兵衛」、「野辺治右エ門」の文字が確認され、この地が家臣の居住する屋敷地であったことが伺える(都城市史編さん委員会 2003)。今回の調査では、それらの屋敷地そのものに関係する直接的な遺構は確認できなかった。

第2節 出土遺物について

16世紀代の中国からの輸入陶磁器や国産の陶器、土師器は、都城(鶴丸城)が廃城となる以前の遺物であり、西城存続期の生活の様相を示すものであろう。トレンチ内に居住の痕跡がなく、出土状況からみてそのほとんどが主要城郭部分からの転落と考えられる。

第3節 自然科学分析について

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定について、トレンチ8内でシラスを主体とする層中に堆積していた黒色土で行った。試料からは、5360±30年BP(2σの暦年代でBC4326-4288, 4265-4217, 4205-4159, 4135-4054年)の年代値が得られ、縄文時代前期の土壌であることが判明した。

西城築城時に地山を平地した際、城山の上部に堆積していた黒色土が崩落し、トレンチ8付近の平坦面に堆積したと考えられる。自然科学分析の結果と土の堆積状況から、トレンチ8付近では、黒色土下層の地山を平坦に整地したと判断できる。

第4節 西城西側の構造の復元について

トレンチ6、9、12の土層断面から、築城当時の西城西側法面の復元を行った。標高161m地点の現状で確認できる西城頂部の平坦面の西端から、トレンチ6では5.8m(第11図A)、トレンチ9は6.7m(第11図B)、トレンチ12は10.0m(第11図C)西側でそれぞれ築城当時の上端の位置を推定し、それをつなげることで頂部平坦面の西側の位置を一部復元した。

また、トレンチ3、4、5、7、8、15では、法面が平坦に整地されている箇所が確認された。トレンチ3、5の標高145.3mで確認された平坦面は、トレンチ5内で途切れており、トレンチ4の平坦面とはつながらない。

トレンチ4の平坦面は標高145m、トレンチ7の平坦面は標高145.4mであり、同一面で接続すると判断した。トレンチ7の南約4mに位置するトレンチ6では平坦面が確認されず、トレンチ7の平坦面は南には長く延びないと推定される。

トレンチ8では、黒色土が堆積する標高147.3mと標高144.6mの2箇所が平坦面が確認された。トレンチ8の北約2mに位置するトレンチ6、南約6mに位置するトレンチ9では平坦面が確認されなかった。よって、トレンチ

8の2つの平坦面は南北に長くは延びないと推定される。

トレンチ15では標高147.8mで平坦面が確認された。トレンチ15の北約8mに位置するトレンチ14では平坦面が確認されなかった。よって、トレンチ15の平坦面は北には長くは延びないと推定される。

以上から推定復元した、築城当時の西城西側の構造の一部を第11図に示した。

第5節 まとめ

今回の調査では、城郭の主要部分が調査対象になっていないことに加え、トレンチ掘削の際、壁面の崩落を避ける必要もあり、調査の内容が制限される結果となった。調査を通して中世の輸入陶磁器や国産の陶器、土師器が出土したこと、トレンチ内の土層断面や確認された平坦面から、築城当時の西城西側法面を部分的に復元できたことが成果である。

都城は本丸を始め、西城、池之上城、中尾之城などの曲輪跡が残存している。これらに加え、豊富な古絵図や文献資料も残されている。今回の調査成果の検証等も含め、今後この報告書が西城や中近世の都城に関する調査・研究の一助になることを期待したい。

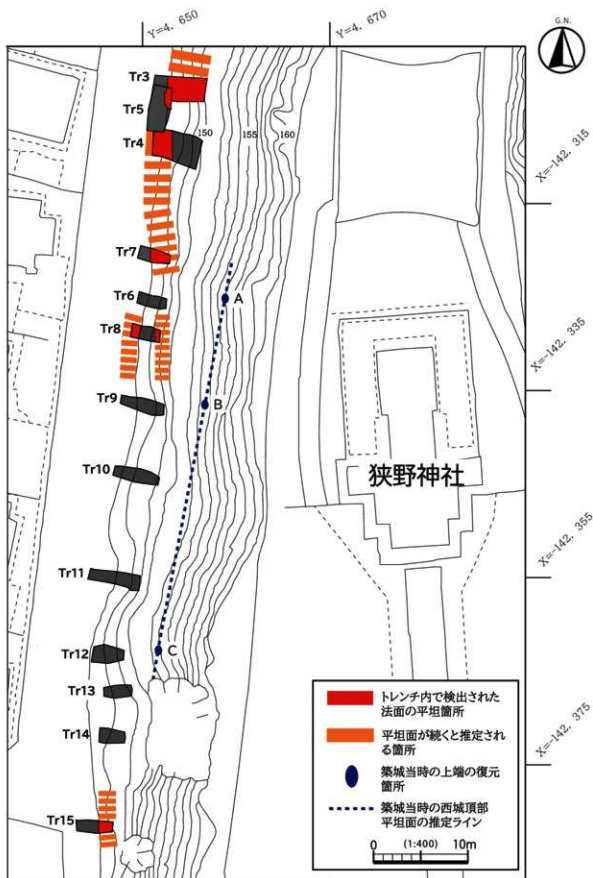
【参考引用文献】

- 都城市教育委員会 1991『都之城取添遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第15集
- 都城市教育委員会 1992『瀬戸ノ上遺跡』都城市文化財調査報告書第18集
- 都城市教育委員会 2012『都城市内遺跡5』都城市文化財調査報告書第105集
- 都城市教育委員会 2014『都城市内遺跡7』都城市文化財調査報告書第113集
- 都城市教育委員会 2015『都城市内遺跡8』都城市文化財調査報告書第119集
- 都城市教育委員会 2019『都城跡～池ノ上城・中尾之城・取添確認調査報告書』都城市文化財調査報告書第139集
- 都城市史編さん委員会 2003『庄内地理志 巻66 中尾口2 五拾河村 城内上』『都城市史 資料編 近世3』都城市
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『母智丘谷遺跡 畑田遺跡 塚塚遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第63集
- 矢部喜多夫 2008『西城跡』『都城市史 資料編 考古』都城市史編さん委員会
- 山下真一 2005『近世 第2章 都城鎮政の確立 第1節 元和の一画一城令と都城のまちづくり』『都城市史 通史編 中世・近世』都城市史編さん委員会
- 山下真一 2007『都城という地名の由来』『図説 西語・北語の歴史』郷土出版社



.....今回調査した範囲(想定) - - - - 拡大範囲

第10図 竹之下都城御城図 都城島津家史料(西城・新城周辺)



第11図 都城(鶴丸城)跡 西城西側の構造復元図 (S=1:400)



調査区遠景（西より 画面奥は大淀川）



調査区 垂直写真（写真右が北）



トレンチ 8 北壁土層断面写真



トレンチ 10 北壁土層断面写真



トレンチ 15 北壁土層断面写真



作業風景①



作業風景②



都城（鶴丸城）跡 出土遺物（青花・白磁・染付）



都城（鶴丸城）跡 出土遺物（備前・輸入陶器・土師器）

報告書抄録

| ふりがな | みやこのじょう(つるまるじょう)あと (にしじょうにしがわのりめんのちょうさ) | | | | | | | |
|---|---|-----------------|--|--|-------------------------|--|-------|--------|
| 書名 | 都城(鶴丸城)跡 (西城西側法面の調査) | | | | | | | |
| 副書名 | 城山西側地区急傾斜地崩壊対策工事 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第268集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 小吹 雅史 | | | | | | | |
| 編集機関 | 宮崎県埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2024年3月15日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| みやこのじょう (つるまるじょう)あと 都城(鶴丸城)跡 (西城西側法面の 調査) | 宮崎県都市部 都島町 763番地1 | 45202 | M5027 | 31度 42分 59秒 付近 | 131度 2分 57秒 付近 | 2023.1.23 ～ 2023.2.08 | 約105㎡ | 記録保存調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 都城(鶴丸城)跡 (西城西側法面の 調査) | 城館跡 集落跡 散布地 | 中世 近世～現代 | 掘削したトレンチ内で、西城を築城する際、地山を平坦に整地したと思われる箇所が確認された。 | 輸入磁器(青花・白磁) 輸入陶器 国産陶器 土師器 | | 景徳鎮窰青花 漳州窰系青花 邵武窰系白磁 褐輪陶器 黒輪陶器 備前(播鉢、甕、水指) 壺(底部～胴部) 皿もしくは杯(底部) 筒丸碗、碗 | | |
| 要約 | <p>都城(鶴丸城)跡は、現在の都市役所から西に1.2km、都城盆地南西部に展開する成層シラス台地の南東端部に位置する。本書で報告を行う調査箇所は、標高147～161m、現在狹野神社が建立されている城山の西側法面に当たる。</p> <p>調査の結果、中世の輸入陶磁器、土師器、国産陶器、近世～現代の染付が出土した。また、掘削したトレンチ内の土層断面や確認された平坦面から、築城当時の西城西側法面の復元を部分的に行った。</p> | | | | | | | |

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 268 集
都城(鶴丸城)跡 (西城西側法面の調査)
城山西側地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024 年 3 月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660
印 刷 有限会社 富士写真印刷
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 7418-2
TEL 0985(74)2179 FAX 0985(74)3066

Miyakonojo City

MIYAKONOJO
(TSURUMARU Castel) ruins

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center
vol.268

2024

Miyazaki Prefectural Archaeological Center